

平成 29 年度 学校総合評価

1 今年度の重点課題に対する総合評価

学校の現状を踏まえ、3項目を重点課題として取り組んだ。年度の初めに設定した数値目標については、どの項目も達成することができた。各重点課題の評価は次のとおりである。

(1) 児童生徒の生活に密着した福祉・進路情報の共有と理解

福祉・進路に関する研修を複数回企画し、職員の研修会への参加率を数値目標として設定し、取り組んだ。障害者福祉サービスや就労移行支援事業所に関する研修を6回実施し、全教職員の研修会への1回以上の参加率は100%となった。小学部、中学部、高等部それぞれの学部で進路に関する情報の共有も進み、障害者福祉やキャリア教育について意識を高めることができた。

(2) 児童生徒会・各専門委員会活動の活性化

児童生徒会執行部が企画する行事や集会と各専門委員会が行うチャレンジ週間への取組を数値目標として設定し、取り組んだ。「なかよしビンゴ交流」、「じゃんけん大会」「思い出スライドショー」の企画や、創立50周年記念集会「人文字50と笑顔の輪」の写真撮影と発表、「ゆめ水族園の作品発表」、「ボッチャ大会」などを行い、児童生徒が積極的にアイデアを出し合い、主体的に取り組む姿が見られた。また、チャレンジ週間への取組では、各専門委員会がそれぞれの目標回数を実施し、全校の活動へと繋げることができた。

(3) 図書室の利用促進と読書に親しむ機会の提供

図書室の利用回数を数値目標として掲げ、図書室の利用促進に取り組んだ。配架の工夫や車いすの児童生徒が利用しやすい環境作りをすることで、利用者の増加につながった。また、校内3箇所に別置図書を配置し、多くの児童生徒が休み時間や登下校の待合に本を見たり貸出したりするようになった。読み聞かせの会の取組では、児童生徒はいつもより集中して楽しく見聞きできたとの意見があり大変好評だった。

2 次年度へ向けての課題と方策

今年度の重点課題の設定目標値は達成したが、どの項目も定着や発展を図る必要がある。次年度に向けた方策等については、以下のとおりである。

(1) 進路・福祉関係の多くの情報を整理し、共通理解を図り有効に活用する方法を探る。得た情報を分野別にファイルし、常時公開できるような仕組みについて検討する。

(2) 学校での経験を、就労や地域生活の場で生かすことができるようにしていく。活動に取り組む過程を大切にして、児童生徒にとって豊かな経験の場となるよう活動の設定の工夫を行う。

(3) 年齢や実態を考慮した取組の工夫を行っていく。社会生活を送る上での、趣味や余暇活動につながるように、多様な活動を仕組んでいく。

3 学校アクションプラン

平成29年度 富山総合支援学校アクションプラン - 1 -		
重点項目	進路支援	
重点課題	児童生徒の生活に密着した福祉・進路情報の共有と理解	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・進路指導の推進については、高等部段階での指導が中心に行われており、早期から将来を見据えたキャリア教育を推進していく必要がある。 ・児童生徒がより豊かな生活を送るために、在学中からの福祉サービスの利用も踏まえて支援していくことが求められるが、教員自身、福祉サービスや進路に関する知識が不足している。 	
達成目標	福祉・進路に関する研修会 5回以上（全職員対象2回）	全教職員の研修会への1回以上の参加 80%以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒を取り巻く福祉の現状を知るための研修会を開催し、全学部の教員に参加を呼び掛ける。また、情報を共有・理解するための機会を学部で設定する。 ・自分が担当する児童生徒の福祉サービスの現状や様子を知るとともに、教員自らがそこでボランティア体験などを体験することで、学校では知ることのできない児童生徒の生活の様子を知る。 ・学校卒業後の移行に向けて、小・中学部の段階から目標をもって取り組むために、卒業生が利用している施設や事業所を見学・体験したり、アフターケアに同行したりして、その実態や様子を知り、見識を深める。 	
達成度	福祉・進路に関する研修会 6回実施（全体研修3回・希望研修3回）	全教職員の研修会への1回以上の参加 100%
具体的な取組状況	<p>○福祉・進路に関する研修会の企画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障害者福祉サービスをテーマとした全体研修を2回行った。1回目は富山市障害者福祉センター基幹相談支援室の相談支援員を招き、2回目はPTA進路委員会と共同で富山市役所の出前講座による研修会を行った。研修に参加した教員から「同じテーマについて2回聞くことで、障害者福祉サービスの理解がより深まった」「個別懇談会でサービス利用について話すことができた」などの感想が寄せられた。 ・教員向けの全体研修として、外部講師を招き、肢体不自由教育におけるキャリア教育の研修を1回実施した。キャリア教育の基本的な考え方や具体的な実践について学ぶことができた。 ・希望研修として、就労移行支援事業所の方から就労支援事業所についての研修や、就労継続支援A型事業所での体験研修、デイサービス事業所等でのボランティア体験を夏季休業中に3回実施した。就労継続支援A型事業所で体験した教員から、「就労継続支援A型事業所で就労に向けてしっかり支援されていることが分かった」との声が聞かれた。 <p>○教職員の研修会の参加状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員の全体研修会への1回以上の参加率は100%となり、小学部、中学部、高等部それぞれの学部で進路に関する情報の共有も進み、障害者福祉やキャリア教育について意識を高めることができた。 	
評 価	A	達成目標を十分に達成した。
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの情報をどのような形で整理し、有効に活用するかが大切である。 ・得た情報を分野別にファイルし、常時公開できるような仕組みについて検討する。 	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・各学部ごとに必要とする進路・福祉に関する情報を整理し、共通理解を進める。 ・研修で学んだことを踏まえ、発達段階に応じたキャリア教育の具体目標を設定し、学部行事や個別の指導計画等に反映させていく。 ・教育支援部と進路指導部との情報共有を進め、在学中の支援から卒業後の進路指導へのスムーズな移行を行う。 	

（ 評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった ）

重点項目	特別活動・特別活動（生徒会活動）	
重点課題	児童生徒会・各専門委員会活動の活性化	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒会執行部に中学部生徒が加わり、高等部生徒と一緒に企画・運営するようになって2年目となり、徐々にではあるが中学部と高等部が協力して、児童生徒会活動を行えるようになってきた。しかし、全校児童生徒が主体的に取り組む活動にまで発展していない。 委員会活動は、中学部・高等部生徒が、保健給食委員会、図書委員会、ボランティア委員会に分かれて、年9回活動している。各委員会で、全校児童生徒を対象とした活動も行っているが、ねらいや活動内容をしっかりと認識して活動している児童生徒が少ない。 	
達成目標	児童生徒会執行部が中心となって企画する行事や集会 5回以上	児童生徒会執行部や各専門委員会が行うチャレンジ週間への参加 80%以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒会執行部が、毎年行っている企画行事のほかに、創立50周年記念事業の一環として集会などを企画する。 児童生徒会執行部や専門委員会で2か月目標を設定する。その期間に、チャレンジ週間を設け、チャレンジ表を用いて、児童生徒全員が取り組めるようにする。 全校児童生徒が目的的に活動できるように、放送で呼び掛けたり、掲示物を作成したりするなどの啓発活動を行う。 	
達成度	児童生徒会執行部が中心となって企画する行事や集会 7回実施	児童生徒会執行部や各専門委員会が行うチャレンジ週間への参加 チャレンジ週間8回実施 平均94.4%
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒会執行部が中心となって企画する行事や集会への取組 <ul style="list-style-type: none"> 児童生徒会執行部企画行事として、3回（各学期に1回）実施した。内容は、「なかよしビンゴ交流」、「じゃんけん大会」「思い出スライドショー」である。また、創立50周年記念集会として、4回実施した。内容は、「人文字50と笑顔の輪」の写真撮影と発表、「ゆめ水族園の作品発表」、「ボッチャ大会」である。 ○児童生徒会執行部や各専門委員会が行うチャレンジ週間への取組 <ul style="list-style-type: none"> 児童生徒会執行部や各専門委員会が2か月目標を設定し、その目標に向けて全校で取り組んでいけるように、チャレンジ週間を設定した。チャレンジ週間を実施した回数は、執行部が4回、保健給食委員会が2回、ボランティア委員会と図書委員会が各1回で、それぞれについて、目標を達成している。 執行部や各専門委員会とも、放送で全校に活動の紹介や参加を呼び掛けたり、掲示物を工夫したりして、活発に啓蒙活動を行ってきた。 	
評 価	A	達成目標を十分に達成した。
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> 学校での経験が、就労や地域生活の場で生かすことができれば、豊かな生活の助けとなる。結果を残すことも大切だが、過程における経験も大切にしてほしい。 参加率をみてもよく取り組んでいると評価できる。継続して行ってほしい。 	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> 執行部や各専門委員会が中心となって活動を行い、全校で多くの児童生徒会活動に取り組めたと思う。今後は、児童生徒がより主体的、自主的に企画・運営できるように引き続き、活動を支援していく必要がある。また、各学部での取組についても、児童生徒が企画段階から関わっていけるように、各学部での組織作りが必要であると考えられる。 	

（ 評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった ）

重点項目	特別活動・学校図書室	
重点課題	図書室の利用促進と読書に親しむ機会の提供	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・図書室を利用する児童生徒が限られており、図書室の環境を整えるとともに図書室の利用を喚起する必要がある。 ・児童生徒の障害が重度・重複化、多様化し、読書の習慣が身に付きにくい。個々の児童生徒の障害の状況や実態に応じて、本に親しむ機会を設ける必要がある。 	
達成目標	図書室の一人あたりの年間利用回数 5回以上	読み聞かせの会の実施 6回以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・図書室に図書室利用カードを置き、年間の利用状況を把握する。 ・図書室を各学部の児童生徒が利用しやすいように配架を工夫するとともにICT環境を整える。 ・各クラスで読書タイムを設定し、図書室の利用促進を図るとともに本に親しむ機会を設ける。 ・外部講師を招き、読み聞かせの会を行う。 ・本に親しむ機会を増やすために、4棟ロビーや1・2階のセンターホールに別置図書を学部文庫として配置する。 	
達成度	図書室の一人あたりの年間利用回数 7.5回(12月まで)	読み聞かせの会の実施 外部講師5回、生徒13回(12月まで)
具体的な取組状況	<p>○図書室の利用促進の取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月から図書室内に図書利用表を掲示して利用状況の調査を開始した。利用表を外して机上で記録できるようにしたり、数種類のシールを置いて好みのシールを選べるようにしたりして、楽しみながらシールを貼るなど調査の工夫をした。 ・6、9、11月に図書クイズを実施した。図書室でクイズの答えを見付け、笑顔で答を箱に入れる姿が見られるなど、児童生徒が図書室を利用するよい契機になった。図書クイズ全問正解者には、読書集会で認定証を授与した。 ・児童生徒が図書を選びやすいように、NDCやISDNの図書分類を参考に再配架したり、車いすの児童生徒が利用しやすいように環境を整えたりした。区分項目や作家名を掲示したことで、本を選びやすくなったとの意見があった。 ・デジタル録音図書を各教室でPC視聴できるように、データをサーバ保存したり、CDを貸出せるようにしたりして環境を整え、職員に周知を図った。 ・9月から4棟ロビーと2棟1・2階のセンターホールに別置図書(貸出・返却利用、図書入替4回)を配置し、図書委員が周囲の学級(学部)に合わせて選書・配架した。多くの児童生徒が休み時間や登下校の待合に本を見たり貸出したりするようになった。 <p>○読み聞かせの会の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・読書月間に、生徒が教室を訪問しての読み聞かせを12回実施し、好評だった。 ・外部講師による読み聞かせでは、お話の間に手遊びがあったり、お話に合わせてバイオリンやホルンを奏でたり、身の回りの物を楽器にして聞かせたりする工夫があり、児童生徒はいつもより集中して楽しく見聞きできたとの意見があり大変好評だった。 	
評 価	A	達成目標を十分に達成した。
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢や実態を考慮した丁寧な対応がよい。 ・社会生活を送る上で、子供たちが趣味や好きなことをもつことは重要である。学校でのこの活動がきっかけとなるとよい。 	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・図書室利用を促進するために、見たい読みたいためになる配架図書を選定する。 ・図書室の情報センター機能を高めるため、誤情報記載図書の廃棄を促進する。 ・外部講師による読み聞かせ会を継続し、読書推進の一助とする。 ・別置図書を継続し、図書に触れ親しむ機会を増やす。 	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)